川越教会主日礼拝説教原稿

前村俊一　2023年10月29日

説教題；「愛は神から出る」

聖書箇所：ヨハネの手紙一　4章７−１２節（新共同訳）

神は愛

愛する者たち、互いに愛し合いましょう。愛は神から出るもので、愛する者は皆、神から生まれ、神を知っているからです。愛することのない者は神を知りません。神は愛だからです。神は、独り子を世にお遣わしになりました。その方によって、わたしたちが生きるようになるためです。ここに、神の愛がわたしたちの内に示されました。わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります。愛する者たち、神がこのようにわたしたちを愛されたのですから、わたしたちも互いに愛し合うべきです。いまだかつて神を見た者はいません。わたしたちが互いに愛し合うならば、神はわたしたちの内にとどまってくださり、神の愛がわたしたちの内で全うされているのです。

本日は、東京バプテスト神学校からの派遣生として、川越キリスト教会の礼拝にお招きいただきありがとうございます。またいつも東京バプテスト神学校、九州バプテスト神学校、西南学院大学神学部の働き、そしてそれぞれの学校で学んでいる神学生のことを祈りに覚えていただき、献金によってご支援いただきましてありがとうございます。引き続きお祈りと献金によるご支援をよろしくお願いいたします。また多くの方に後援会にご加入いただきますようお願いいたします。

東京バプテスト神学校は、献身の決心をして入学することも、巻頭言に書きましたように、自らの信仰の成長のために学ぶこともできます。どちらの道も開かれていますので、皆様の中で神学校での学びに興味のある方がおられましたら、是非その一歩を踏み出していただきたいと思います。

さて、我が家のリビングには、「みことばカレンダー　花の祈り」が掛けてあります。カレンダーといっても、花の絵の横にみことばが毛筆で書かれているだけで、月日は入っていません。これが15枚綴られています。これは妻が闘病中に買い求めたものです。闘病中、妻は時々めくって書かれているみことばを味わい祈っていたのでしょう。でも、私は気にかけていませんでした。妻が天に召されて私がこのカレンダーに心に留めたときには「私たちは互いに愛し合いましょう。愛は神から出ているのです。」になっていました。私はこの聖句を気に入りましたので、以来一度もめくらずに6年近くこの聖句が掛けられたままになっています。

本日は、妻がおそらく一番気に入って私に残してくれたと思われるこの聖句について、説教をいたします。

新約聖書には、ヨハネという名のついた文書が５つ収載されています。ヨハネの黙示録の著者がヨハネ福音書の著者と全く異なることは識者の一致するところでありますが、福音書と３つの手紙は、文体や福音理解に共通点も多いことから同じグループ・教派の人たちによって書かれたと言われています。筆記者集団をヨハネの教会とかヨハネ教団と言っています。書かれた時期も、書かれた場所も違うと考えられています。

ヨハネ教団は、最初パレスチナとその周辺で、イエスがメシアであるとの宣教活動を展開していました。ところがこの頃、ユダヤ教主流派がイエスをキリストと信じる人々をユダヤ教の会堂から追放するという「会堂追放」運動が起こります。そのため、ヨハネ教団の人々も会堂から追放されてしまいます。この時期つまり紀元80年代から90年頃にヨハネ福音書は書かれたといわれます。ユダヤ教主流派から決別して、彼らとの緊張関係の中で、ヨハネ福音書は「神の独り子なるイエス・キリストを鮮明に確認するため」に書かれています。その後、ヨハネ教団は小アジア地方へ移動しました。そしてこの時期に、このヨハネ福音書の読み方についての福音理解に相違が生じて教会の内部に分裂が生じました。ヨハネの手紙一は、それらの分離主義者を「反キリスト」と呼んで、批判、排除する目的で書かれています。書かれたのは紀元100年前後と考えられています。

ヨハネ文書の解説は、この辺にしておきまして、本日の聖書箇所の意味を考えてみることにいたします。

７節「愛する者たち、互いに愛し合いましょう。」

なんと素敵なみことばでしょう。「愛する者たち、互いに愛し合いましょう。」　これはこの手紙を書いた人が読む人に努力目標として奨励しているのでしょうか。そうではありません。みことばカレンダーにあるように「愛は神から出るもの」　泉のように神から溢れ出てくるものであって、自然に愛し合うことができるというのです。どういうことでしょう。

神から出てくる愛とは一体どういうことか。これが本日のテーマです。

その答えは9節に書いてあります。「神は、独り子を世にお遣わしになりました。その方によって、わたしたちが生きるようになるためです。ここに、神の愛がわたしたちの内に示されました。」とあります。イエス・キリストの受肉そのものが神の愛だというのです。

努力が報いられたとか、祈ったことが叶えられたとか、病気が治ったとかそういったものを通して神の愛がわかるというのではない。そうしたものは、天災とか肉親の死とか、友人に傷つけられたとかいった事情によって容易に神の愛ではなくなってしまいます。かえって神がわからなくなってしまい、神を否定するに至ります。

まさに、私自身がそうでした。信仰深い妻が苦しみ抜いて天に召された。長年待ちに待った待望の初孫が生まれる直前に、初孫を抱くこともなく天に召されました。妻のこれからの人生の楽しみの全てが失われ、私たち家族も大きな喪失感を味わいました。これが神の愛なのですかと何度も神様に尋ねました。

本日の聖書箇所は、その答えなのだと思います。神の愛とは独り子をこの世にお遣わしになったという歴史啓示によって与えられたということなのです。神の独り子イエス・キリストの十字架と復活によって、わたしたちが罪赦されて永遠の命に生きることができている、これこそが神の愛だというのです。

10節には、神の愛についてのさらなる説明が書いてあります。「わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります。」

日本には各地に神社があります。山の頂にも、巨岩の下にも祠が置いてあります。日本人は天災を恐れ禍いを恐れて、神々を崇敬しつつも怒りをかってたたられないように神社を建て祠を設置して、賽銭を投げて祈ってきました。わたしたちキリスト者も教会で日曜日ごとに礼拝を捧げて神を賛美しています。

このことについて、10節では、わたしたち人間がまず神の存在を認め、祭壇を築き礼拝するようになったのではないと言っています。神がまず存在し、そして世界と人間を創造されたのです。アダムとイブによって罪が人間に入ったことにより、神と人、人と人との関係性を失ってしまいました。その結果「この地は神の前に堕落し、不法に満ちた」状態となり、人間同士は支配し支配される関係に陥ってしまいました。

そのような地上の世界に、「わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました」。キリストの十字架の贖罪によって、もう一度新しく命の息吹を吹き入れられて、神様との関係性を回復し、わたしたちが神を愛することができるようにしてくださいました。そしてまた、人間同士も互いに愛し愛される可能性が回復されたのです。ここに神の愛があります。この神の愛に対する応答として、わたしたちはこのように今日も教会に集い、感謝の礼拝を捧げているのです。

11節「愛する者たち、神がこのようにわたしたちを愛されたのですから、わたしたちも互いに愛し合うべきです。」　これは、ヨハネ福音書13章34節の「あなたがたに新しい掟を与える。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。」に対応します。

福音書では、弟子の足を洗ったイエスが、弟子たちに新しい掟として命じています。しかし、ヨハネの手紙では「神がこのようにわたしたちを愛されたのですから、わたしたちも互いに愛し合うべきです。」と、　読者に論理的に納得させようとしています。互いに愛し合うことは、キリストの愛を与えられ受け入れた者の内面的な応答責任だというのです。わたしたちはこの応答に応えなければなりません。この手紙を読み、神の愛を知らされて、それを信じ感動して、互いに愛し合うことがキリスト者のまことの証しなのです。

12節の「わたしたちが互いに愛し合うならば、神はわたしたちの内にとどまってくださり、」　は、その前の3章23節と24節に詳しく説明してあります。

「神の子イエス・キリストの名を信じ、この方がわたしたちに命じられたように、互いに愛し合うという神の掟を守る人は、神の内にいつもとどまり、神もその人の内にとどまってくださいます。」ということです。

12節の最後の部分「神の愛がわたしたちの内で全うされているのです。」については、ヨハネ福音書14章23節に「わたしを愛する人は、わたしの言葉を守る。わたしの父はその人を愛され、父とわたしとはその人のところに行き、一緒に住む。」とあるように、ただとどまるだけではなく、一緒に住む、神とキリストの愛がその人の内に宿るということなのです。

この聖句を読んで、私は三浦綾子の「道ありき三部作」の中のある場面を思い出しました。三浦綾子は若い時に結核を患い入退院を繰り返していました。ある結核病棟で、一番症状の重い年配女性の患者さんの病床に、多くの患者さんが頻繁に訪れて癒されているという話です。痛みや諸々の症状に苦しめられて、苦悩の中にあるはずの女性が頼られ、病床にきた人々を癒しているという話を、30年前に読んだ時はなぜだろうと不思議に思いました。この女性は誰よりも神を愛し溢れるばかりの神の愛がとどまり住みついいていたのでしょう。そしてその神から出てくる愛を訪れる人々に注ぎ続けていたのだろうと、本日の聖書箇所を読んでやっと理解できました。

私たちも神の愛の内にとどまり、神のことばを守り神の愛を宿して互いに愛し合いましょう。「愛は神から出る」ものですから、神とキリストの愛を宿しているわたしたちは、その愛の力によって互いに愛し合うことができる。これが本日のみことばからのメッセージです。

お祈りします。

主なる神様、今日もあなたに生かされ、あなたに呼び集められて、ともに礼拝を捧げられる恵みを感謝いたします。わたしたちは自分の決心や力では人を愛しきれません。助けの必要な人のかたわらを平気で通り過ぎてしまう弱い者です。そのような私たちをあなたの愛、キリストの愛で満たし、助けを求めている人に手を差し伸べられるようにしてください。主、イエスキリストのみ名によって祈ります。